

# 2009年 首都圏統一 帰宅困難者対応訓練 実施報告書



2009年 首都圏統一帰宅困難者対応訓練 実行委員会



## すべての皆様のご協力に対し心より感謝いたします

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練が、9月26日、徒歩帰宅訓練3,558名、エイドステーション訓練1,070名、情報伝達訓練146名の総勢4,774名の皆様の大変な努力により、成功裏に終了することができました。

東京災害ボランティアネットワークが1999年より7回にわたり実施されてきたこの訓練は、その意義が認識、継承され、07年からは、1都3県の主体となる取り組みに発展し、この取り組みに関わっていただく共催、後援、協賛、協力団体は年を追うごとに増え、今回も、この報告書に記載されているような多くの団体個人の皆様の熱意が寄せられました。

実行委員会を代表し、関係されたすべての皆様のご協力に対し心より感謝いたします。

さて、あらためて申し上げるまでもなく、この訓練は、首都直下型地震発生時に生じるとされる、首都圏想定帰宅困難者650万人に対応するものです。地震発生時の多くの課題の一つに過ぎませんが、私たちは、この訓練を通じて「自治体や企業、ボランティア・労働・福祉などの各種団体、個人」が、人口密集地である大都市圏における大災害への認識を共有し、訓練準備から実施に至る過程で醸成される貴重なネットワーク、訓練中での「さまざまな気づき」などに大きな意義と目的意識を求めるものです。

09年中も日本で多くの自然災害が発生し、新年早々にも、1月13日のハイチ大地震が発生し、その被害規模は、国家の存在そのものをも揺るがす程の状況が進行しております。首都圏でのM7以上の発生確率は30年以内70%といわれており、この種の取り組みの重要性を改めて認識し合いたいと思います。

この報告書では、初めて、「参加者のスタートから完全徒歩までのレポート」やさまざまな今後の課題も掲載いたしましたので是非お読みいただき、それぞれが今後の取り組みの糧にしていいただければ幸いです。

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会  
実行委員長 遠藤 幸男



# 2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実施報告

日 時	2009年9月26日(土) 10:00 出発:日比谷公園 17:00 解散:4コース各ゴール地点		
場 所	東 京コース:日比谷公園～都立光が丘公園 19.8km(東京都練馬区) 千 葉コース:日比谷公園～行徳駅前公園 18.2km(千葉県市川市) 埼 玉コース:日比谷公園～川口駅西口公園 17.6km(埼玉県川口市) 神奈川コース:日比谷公園～等々力緑地 16.0km(神奈川県川崎市) 埼玉県内コース:滝野川公園～武蔵浦和駅ラムザ前広場 神奈川県内コース①:横浜市沢渡中央公園～川崎市等々力緑地 神奈川県内コース②:大和市大和公園～藤沢市藤沢市役所		
内 容	徒歩帰宅訓練	参加者数:3,558名	
	エイドステーション設置訓練	参加者数:1,070名	
	情報伝達訓練他	参加者数:146名	総参加者数4,774名
主 催	2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会		
主 管	東京災害ボランティアネットワーク		
共 催	東京都石油業協同組合、JB日本接骨師会、東京労働者福祉協議会、神奈川労働者福祉協議会、東京ボランティア・市民活動センター、連合東京、連合埼玉、連合千葉、連合神奈川、東京都生活協同組合連合会、東京YMCA、シャント国際ボランティア会、自立支援センターふるさとの会、真如苑SeRV、中央労働金庫、全労済東京都本部、(株)レスキューナウ、日本防災士会、地域創造ネットワークジャパン、埼玉県		
後 援	東京経営者協会/東京商工会議所/東京都中小企業団体中央会/東京工業団体連合会/東京都商工会連合会/東京都/千葉県/神奈川県/特別区長会/千代田区/中央区/港区/江東区/江戸川区/文京区/豊島区/北区/新宿区/中野区/練馬区/品川区/大田区/浦安市/市川市/川口市/蕨市/戸田市/さいたま市/川崎市/横浜市/大和市/藤沢市		
協 賛	尾西食品株式会社		
協 力	エイドステーション設置協力:二松学舎大学/(株)トーハン/西早稲田地域交流館/(株)クラヤ三星堂/東京日産自動車販売(株)谷原支店/ホテルカデンツァ光が丘/築地本願寺/都立東高校/日本大学/明治学院大学/荏原特別養護老人ホーム/(株)アルプス電気		
物品提供協力	フード連合/(株)ニチレイ・ニチレイ労働組合/不二家労働組合/フジパン労働組合/全日本たばこ産業労働組合/明治製菓労働組合・明治製菓(株)/(株)マルハニチロ食品・マルハユニオン・ニチロ労働組合/明治乳業労働組合/麒麟ビール労働組合/全森永労働組合/敷島製パン労働組合/味の素(株)・味の素労働組合/サッポロ飲料(株)・サッポロビール労働組合/木村屋総本店労働組合・(株)木村屋総本店/コープとうきょう/パルシステム生活協同組合連合会/(株)SGラボ/清泉女子大学/サラヤ株式会社		
運営協力	ちよだボランティアセンター/新宿ボランティア・市民活動センター/中野ボランティアセンター/練馬ボランティア・市民活動センター/西東京市社会福祉協議会/江東ボランティアセンター/江戸川区ボランティアセンター/浦安市社会福祉協議会/浦安災害ボランティアネットワーク/市川市社会福祉協議会/市川災害ボランティアネットワーク/みなとボランティアセンター/大田区社会福祉協議会ボランティア・区民活動センター/文京ボランティア・市民活動センター/豊島ボランティアセンター/北区ボランティア・NPOぷらざ/北区社会福祉協議会/川口市社会福祉協議会/連合東京西北地協/連合東京東部地協/連合東京中南地協/連合神奈川川崎地域連合/川崎労働者福祉協議会		
資機材・運搬協力	太陽工業(株)/ヤマト運輸労働組合北東京支部/全日通労働組合東京支部中部地域協議会/ジェイアール東日本物流労働組合		
活動助成	東京都共同募金会/連合 愛のキャンパ		

順不同

東京  
コース

# 完全徒歩レポート

東京在住会社員(34歳♀)。首都圏統一帰宅困難者訓練で東京コースを一人で歩いてみた。これまでスタッフとしてお手伝いをしたことはあっても、コース全部を歩くのは初めて。日頃運動など一切していないのに、20kmなんて歩けるのか……？ 帰宅困難者対応訓練の徒歩レポート、スタート。



(注釈は、首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会によるものです)



① ただ歩くだけでも気づきを得られる訓練ではあるが、歩きながら災害をイメージできれば、より多くのことに気づかされる。今回の開会式ではそのことが強調された。

② 滞留目的別に帰宅困難者数を想定した場合、88%が「業務・学校」という数値が出ている。

③ 集団心理が働くのだろうか。訓練でもこうなってしまうことを考えると、災害時は、道路をふさいでしまうことも考えられる。



## 歩け歩け大会ではありません

2009年9月26日(土)。2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練の、東京コースに参加した。20kmなんて歩いたことは……もちろんない。かなり不安に思いながら、まずは受付で水とゼッケンを受け取り、開会式の挨拶を聞く。

「これは、歩け歩け大会ではありません」。開会式の挨拶で実行委員長が何度もそう言っている。歩け歩け大会？ そうかウォーキング大会ではありませんという意味かとハタと気づいた。確かに、これは徒歩帰宅訓練であってウォーキング大会ではない。つまり、「歩くこと」が目的のすべてではないということなのだ。そうか、**ただ歩けばいいというわけではない**んだなと、改めて気を引き締めた。

朝10時に日比谷公園を出発。色違いのバンダナをしている人たちが固まって先に行く。グループで参加している人なのだろうか。周りを見ると、若い人、老夫婦、子ども連れ、いろんな人がいる。当たり前のことではあるが、

災害時に帰宅困難者になるのは何もサラリーマンだけではないはず。老若男女、**いろいろな人が帰宅困難者になってしまう**かもしれないわけで、そう考えると、この訓練参加者は帰宅困難者の縮図なのかもしれない。

そんなことを考え、小さな背中に大きなゼッケンを着けた女の子と、そのお父さんがどんどん先に行くのを見ながら、皇居のお堀沿いの道に入っていよいよ本格的にスタート。



## 訓練と災害時の「人」

出発前にスタッフから、「ジョギングの人たちの邪魔にならないように、2列で歩いてください。必ず苦情が出ます」と言われていたが、私の前後はかなり広がって歩いていた。狭いところでは、**道の三分二を徒歩帰宅訓練の人が歩いている**。私たちの向かって右側を、前からジョギングの人たちが走ってくるので、気が気ではなかった。周りにスタッフがいなかったので、口伝えにみんなが左に寄ればいいのかと思って前と後ろに「もっと左に寄って歩きますか」と声をかけてみるが、あまり効果がない。少し前のほうに行ってもまた言ってみるも、やっぱり同じ事だった。そのうちにお堀沿いの道も終わりに近づいてきたので、黙々と歩く。

皇居を離れると、前後に人が並んで歩くことも少なくなってくる。混み合っていると自分のペースで歩くことは難しいが、徐々に自分のペースで歩けるようになってきた。と思ったら、一つめのASがあった。二松学舎大学の入り口らしい。ここでは給水とトイレがあるという。

それほど喉が渴いていたわけではないが、せっかくなので、水を飲んでみた。思いのほかおいしく感じた。自覚はなくとも体は水分を求めているのかもしれない。考えてみれば受付でもらった水がまだあったのだが、目の前で「どうぞ」と言われるとついもらってしまう。災害時に避難所で配給などがあった時に「自分は食べ物を持っているからもらわなくても大丈夫です」とはならないだろうし、**もらえるものはもらっておこう**というのが大多数の人が考えることなのだろう。でもそれは、欲とか何とか単純には言えないことのような気がするが、よくわからない。多分、私はもらってしまう気がする。

看板を見ると次のASは「トーハン」というところらしい。トーハンって何だろう、と思いつきながら歩き出した。

## ベビーカーで選択肢が広がるか

飯田橋を過ぎて少しすると、二つめのASがあった。ここがトーハンのASのようだ。トーハンは印刷会社で、通り沿いの駐車場がASになっている。あまり広い場所というわけではないが、それでも地域の町会のテントが張っており、マラソンの給水所といった雰囲気。

ここでは**バナナの配給**があった。少し疲れてきたところに甘いバナナ。これはおいしかった。しかし、このASにはトイレがなく、少し先のコンビニがGSで借りて下さいとのこと。そうか、**トイレのないASもある**のかと思った。確かにトイレがなければいけないわけではないが、ちょっと意外な感じもした。とはいえ、この訓練にはコンビニやGSが協力しているということも聞いている。そこでトイレを借りられればいいわけで、トイレの設置がASの絶対条件ではないわけだ。

前に、ベビーカーを押して歩く若いお母さんがいた。後ろにはお父さんらしき人もあるいている。

「ベビーカーで歩かれていますか」

「ええ、この子も最初は歩いていたんですけど、日比谷公園を出る時から乗って言い出して……。全然歩いてないんですよ」

そう苦笑しながら言うお母さんは、かなりのハイペースだった。お父さんが後ろから小走りについて行くという感じ。ベビーカーだと歩きやすいのだろうか？ またたく間に先のほうへ行ってしまった。外出先で小さな子どもと一緒に帰宅困難者になることもあるだろう。小さな子どもがいては長距離の移動は難しいのではないかと思っただけ、その時にベビーカーがあれば「歩いて帰る」という選択肢も出てくるのかもしれない。とはいえ、**大地震などでは道路が変形**してベビーカーを押せるとは限らないけど。

## 避難者になる人を見てみる

次のASは西早稲田地域交流館。ここではトイレ、給水、パンの提供があった。パンをいただく前にトイレを借りることにする。スタッフが「男性用のトイレが混雑しています」と、札を持って入り口で声をかけている。女性用ももちろん並んでいた。ふと気づくと、並んでいるのは、訓練参加者だけではなく、この施設を利用している方もいた。何だかこの施設を利用している人には申し訳なく思ってしまった。

たとえば、災害時、ここが避難所となった場合、施設を利用している人(避難者)と、



4 災害時には、必要なものを必要な人に渡さなければならないが、なかなか難しいかもしれない。



5 今回の訓練では、食料品を扱う企業やその労働組合が、携帯食としてさまざまな食品を提供してくれた。

6 エイドステーションにはいくつかの機能が考えられる。トイレ提供もその一つと言えるが、絶対条件というわけではない。

7 1995年の阪神・淡路大震災では、高速道路が横倒しになるなど、道路環境は大きな被害を受けている。



8  
場合によっては、こうなることも考えられる。特に橋などが通行不能になった場合、その近辺では可能性が高い。

9  
5を参照



10  
6参照

11  
距離感を把握するのは難しい。実際に歩いてみることによって、その感覚を得ることも、この訓練の大きな目的。



12  
高齢者を含む災害時要救護者が帰宅困難になってしまった場合は、個別の対応が必要になるのではないだろうか。

13  
6参照



帰宅困難者として外から来た人の折り合いはうまくいくのだろうか。災害時の混乱の中では多分無理だろう。でも、帰宅困難者の大多数は比較的若い人になるだろうし、避難所に避難してくる人はそれだけではないだろう。うまく折り合いをつけないと、帰宅困難者が多数通ることが予想される大通り沿いにある避難所などは、**避難者よりも帰宅困難者の方が多くなってしまおう**なんていうことにもなりかねないのではないだろうか。

トイレが済んだ後、**あんパンをもらった**。お茶が残り少なくなっていたので、配っていた水のペットボトルももらった。広場の端に腰を下ろしてお茶を飲み、昼食が近いから迷ったが、空腹で歩くのは辛さが増すだろうと思い、パンもおいしくいただいた。

「次のASまでは1.3キロです」とスタッフが教えてくれた。1.3キロが近いのか遠いのかわからない。とりあえず歩く。すると、ほどなくして清水橋公園ASに着いた。前のASから近いからか、あまり混雑しておらず広々とした印象だった。ここではトイレ、給水、**アメの提供**があった。うちわも配っていた。アメのような携行食(?)は非常にありがたいと思った。歩きながら口に含める物があれば何となく疲れもとれるし、糖分の補給にもなる。

看板を見ると、次のASまでは3.5キロとあった。やはり**3.5キロの距離感**はわからなかったが、「40～60分」と書いてあるので、どのくらい疲れるかは判断できた。少し疲れてきていたので、正直ゲンナリ。

## さまざまな参加のかたち

私の少し前に、自転車を押して参加している年輩の男性がいた。だんだんとペースが落ちていくように感じたので気になり、声をかけてみた。

「大丈夫ですか？」

するとこちらを見て「お昼の場所はまだですかね」と言う。やっぱり、疲れている感じが見える。

「前のASから40分は歩いているから、もう少しだと思うんですけど。自転車を押しての参加なんですね？」

「前にママチャリで日本一周をしたもんでね」

「へえ！ おいくつくらいの時にですか？」

「10年くらい前です」

それを聞いてびっくりした。その方はどう見ても80歳以上の高齢者。10年前といってもかなりのお歳のはず。聞いてみると、あと2カ月で90歳になると言う。

災害時に、90歳の方が帰宅困難者になるというのはあまり考えにくいけど、それでもゼロではないだろう。お会いしたのはかなり元気な方ではあるが、やはり**高齢で帰宅困難になってしまったら**大変だ。なんてことを思っているうちに、ようやく昼食の場所となる江原公園ASが近づいてきた。

ここは大きな公園で、遊具、トイレ、ベンチなどがある。木陰にブルーシートがひいてある。靴を脱ぎたかったので、ベンチではなくブルーシートに行く。昼食は**お赤飯**と、さんまの缶詰と、バナナ。

ご飯を食べていると、東京コース最後尾の親子が昼食を受け取って腰を下ろしていた。小学3年生の男の子とそのお父さん。お父さんは「最後になりましたね。いやあ、疲れましたよ」と言うが元気そう。男の子はちょっと疲れ気味の様子だった。

「歩いている時に親子で災害の話をしったりしますか？」

「被害想定が直下型地震の後、ということなんで息子の『直下型って何？』

という質問に『東京の真下で地震が起こってね……』という話はしましたが、それ以外はあまり災害の話はしてないかな」

開会式で「災害時を想定していろいろと話してみてください」と実行委員長が言っていたが、歩き始めてしまうと疲れもありなかなか難しいようだ。それでも「歩きながら話すのはシンドイけども、自分の中ではいろいろと考えちゃうね。帰ったら子どもにも聞いてみるよ」と言っていたのを聞いて少し安心する。

ベンチで休んでいた50～60代の女性二人にも話を聞いてみた。彼女たちは、光が丘に住んでいる仲間五人で参加しているようだ。

「この訓練が**新聞に出てた**®(掲載されていた)でしょ。それを見た時は行こうとは思ってなかったのよ。でも、誘われてね」

「そうそう、一人だったら参加しなかったわ」

昼食をとり少し休んだ後だったからか、おばちゃんたちは元気に、どこか楽しそうに答えてくれた。さすがに一人では参加できないというのは同感。私は一人だけでも。

やはり帰宅困難者になってしまった場合も、仲間がいるのといないのとでは、疲労や気持ちの面で大きく違うのだろう。一人で徒歩帰宅することになってしまったら、良からぬことをいろいろと想像してしまいそう。仲間がいて**励ましあいながらの徒歩帰宅**®であれば、気休めだとしても気持ちが楽になるのではないかと思った。

## 「歩いてみる」ということ

彼女たちに挨拶をして、公園を出た。40分くらいの休憩だったが、気持ちのいい彼女たちに出会って、すっかり元気になったような気がした。が、歩き出して少しすると、やはり元気に「なったような気がした」だけだったことがわかった。前を歩く参加者はおらず、スタッフも見あたらない。これまでは比較的に日陰を歩くことが多かったが、ここでは建物が少ない広い道が続き、少し傾きかけた午後の日差しが直接身体にあたる。足裏だけでなく、脚全体が痛くなって来る。なぜか肩も痛い。履き慣れたスニーカーでさえこれなのに、**ヒールのある靴やサンダル**®では、私は絶対に歩いて帰れないだろう。

少し前に、白いゼッケンをつけた女性の姿が見えた。立ち止まって、振り返ったりしている。少し早足になって追いつくと「道はこのままでいいのよね」と話しかけられた。前後に黄色ゼッケンを着けたスタッフも白ゼッケンを着けた参加者もないから不安になったようだ。

しばらく話しながら一緒に歩く。一人での参加だそうだ。

「ずっと一人。一人がいいの。ウォーキングが趣味でね。40代50代のころはもっと歩いたけど、80代半ばとなった今では20キロくらいね」

ウォーキングが趣味、と言うので“歩け歩け大会”という感じで参加しているのかな、と思い聞いてみる。

「今日は徒歩帰宅訓練ですけど、災害のこととかは考えますか」

「うん、最近地震が多いでしょう。**都心に出た時に帰れるか**®とか、考えるよね」

練馬区に住んでいるというから、この訓練はちょうど家に帰る感じらしい。

「わかってはいるけども、地図で見たり、**車で通ってばかりいたんじゃないことが多い**®と改めて感じるね。実際に歩いてみると距離感もわかるし」

確かに。私は家と全然違うコースを歩いているから地図を見ても現在地がわからないし、車でも通ったことがないから距離感もわからない。帰宅ルートだったら自分の現在地もわかるだろうし、距離感もわかるのだろう。そして帰宅ルートであれば、もう少し周りの情



14

今回の訓練では、ローカル新聞や地域FM、また地域団体の広報などで参加者を募った。

15

単独での徒歩帰宅には危険が伴う可能性が高い。同じ方面に向かう者同士がお互いに励ましあいながら徒歩帰宅できれば、その危険を回避できるだけではなく、気持ちの上でも大きな力になるだろう。



16

「帰宅困難者になる＝長距離を歩く」ことを考えると、革靴やヒールのある靴ではかなりの困難が予想される。職場や学校に歩きやすい靴を用意できればいいが……。



17

帰宅困難者になる可能性が高いのは通勤者や通学者と想定されるが、もちろんそれだけではない。買い物やレジャーで都心に出た者が帰宅困難者になることも十分考えられる。

18

地図や車で帰宅経路を確認するだけでも、大きな安心感を得られるかもしれないが、実際に歩くことによって気づくことは多い。



19  
⑥参照



20  
帰宅困難者にとって安心感は非常に重要。だが、大災害時にどれだけ安心感のある建物が残っているだろうか。

21  
東京都石油業協同組合は大災害時に帰宅支援ステーションとしての役割を果たす。そのために八都県市と協定を結んでいる(P12参照)。

22  
現在、数多くの企業がBCP(事業継続計画)などを作成し、災害対策(危機管理対策)に取り組んでいる。



23  
企業や業種別団体(組合)などのいくつか、自治体(県や市区町村)と災害時における協力協定を結んでいる。

景も違うものに見えるかもしれない。

自分のペースでどうぞ先に行ってね、と言われ、また一人で歩き出した。

## 心強い、企業の協力

次のASはまだかまだか、とそれだけを考えながら歩いていると、遠くにのぼりが見えてきた。

クラヤ三星堂という会社の駐車場にASがあった。テントが立てられ、**アセロラドリンクを提供**⑩していた。ボーイスカウトとおぼしき格好をした人もスタッフにいる。

車の影に座って、ドリンクを飲む。甘酸っぱさがおいしい。すると小学生の子どもたちとそのお母さんたちが後からやってきた。子どもたちはかなりぐったりしている様子。お昼を食べた後くらいに疲れがやってきてしまったようだ。椅子に座って、アセロラドリンクをおいしそうに飲んでいる。

ここでトイレを借りようと聞いてみると、きれいなオフィスビルの中だった。一日外を歩いているだけで、このようなビルに入ったことが場違いに思えて不思議な感じだった。同時に、**清潔なビルの中を歩いていると安心感がある**⑪。トーハンASでも思ったが、大勢の人が使うであろうこのような訓練に場所を提供してくれる企業は、懐が広いと思った。

クラヤ三星堂ASを出て歩く。途中の**ガソリンスタンド**⑫の前に、この訓練ののぼりが立っていた。黄色ゼッケンを着けたスタッフはいないが、多分ここでもトイレなどを借りることができるのだろう。歩道近くにいた従業員と目が合ったが、表情も変えずに業務を続けている。私はゼッケンをつけているから訓練中の人間だとわかっているだろう。「お疲れ様」と声をかけたりしないのかなと期待したが、そうはならなかった。営業中であることを考えれば当たり前か。施設を提供してくれているだけでもありがたいと思わねば。

途中、日産自動車の営業所の前に黄色ゼッケンを着けたスタッフがいたので、トイレを借りた。スタッフと一緒に営業所に入ると、カウンターにいた職員がいっせいに「どうぞどうぞ」と言ってくれた。少し恥ずかしい感じもしたが、「使っていいんだ」と思えて嬉しかった。そこから少し行ったところのガソリンスタンドにも訓練ののぼりが立っていたので、洗面所を借りた。こちらもやはり営業中。一般のお客さんもいたのでやはり恥ずかしい感じがした。とはいえ、営業中にもかかわらず、協力してくれるというのは、その**会社の防災の意識**⑬が高いからなのだろうか。

次のASはなんとホテルだった。ホテルカデンツァの前にテントが立っていた。聞けば、このホテルは災害時に帰宅困難者支援拠点として練馬区と**協定**⑭を結んでいるという。なるほど、小学校や中学校などの公共施設は地域の方々の避難所になってしまうから、ホテルのように民間で広い場所を持っている施設が帰宅困難者支援をするというわけだ。

さすがに相当バテている。腰を下ろして休憩したかったが、かなり遅いペースになっていることもあって、水を飲んで、エアーサロンパスをふくらはぎにかけただけで、出発することにした。

## ゴール!!!

足裏から腿まで、脚全体がかなり重くなっている。とにかく少しでも前に進むことだけ考える。すると、沿道にいるスタッフの「向こうに見える緑が、ゴールの入口です」という声が聞こえた。ゴールが近いと思い、あともう少しと自分で自分に言い聞かせる。

だがしかし、緑が見えてからが長かった…。歩いてても歩いてても緑はあるのに入口がない。光が丘公園<sup>24</sup>がこれほど大きな公園だとは知らなかったこともあるが、延々と続く緑に苛立ち始めた頃、近づかなかったゴールの公園の、やっと入口に辿り着いた。

ゴール地点には、大勢のスタッフがいた。その大勢のスタッフが拍手で出迎えてくれた。ちょっと恥ずかしいけども、やはり20キロを歩いた後で「ご苦労さま」と声をかけてくれるのは嬉しいものだ。

修了証、アンケート、記念品をもらって、一目散でビニールシートの上に座る。修了証には、災害伝言ダイヤル171<sup>25</sup>の使い方が書いてあった。

使ったことがないので、早速体験できる時に体験してみようと思った。アンケートはチェックを入れるだけの簡単なものだった。感想を書く欄がないけどいいのだろうか。とはいえあっても書く元気はないけど。また記念品として笛と防災ゲームをもらった。ゲームは帰宅困難者をテーマにしたパソコンゲームらしい。あまりゲームをやらない私だが、面白そうなので体験してみようと思った。実は、そのゲームに付録として付いていた笛<sup>26</sup>の方が嬉しく思ったのだけだ。

一休みしていると、道中出会った参加者の方が続々とゴール地点に到着していた。せっかくなので、ゴール後の感想でも聞いてみようと思ひ声をかけてみた。

子ども連れのお母さんは「災害時のことはやっぱり考えますね。主人が建築関係の仕事をして

いるものですから、主人もこの子もいろいろと興味もあるみたいです」と答えてくれた。80代の女性は「こうして災害時を想定して都心を歩く機会なんてないから貴重な経験になったわ」と言う。最後にゴールしたのは、江原公園でも最後だったお父さんと小学生の男の子だった。男の子に「こういう訓練があったら、また歩く？」と聞くと、いや～という感じで頷けなかったが、書いているアンケートを見ると「まだ歩ける<sup>27</sup>」にチェックが入っていた。ちなみに私は「昼食地点で疲れてしまった」だった。正直、もう歩けない……。

## 初めて全行程を歩いてみて

今回の訓練で、自分自身が20kmくらいはなんとか歩けることがわかった<sup>28</sup>。もちろん、水と食料とスニーカーがあつたのだが。そして、さまざまな施設や人の応援があつて、やっと歩けるのかもかもしれないと思った。訓練のあと、自分の職場から家までの距離を調べてみると10kmくらいだということがわかった。ということは、交通機関が麻痺しても家まで歩いて帰ることができそう。自分が何をを用意しておけばどれだけのことができるのか、それがわかったのはとてもよかった。

災害が起きた時に、企業や団体がいきなり「帰宅困難者の支援をしよう」と思っても難しいだろう。こうした訓練を重ねていくことで、支援をしたいという気持ちを行動に移せるようになるのだと思う。また、誰もかも帰宅困難者になる可能性がある<sup>29</sup>のだから、始めは「歩け歩け大会」のつもりでもいいから、職場や学校から家までの道を一回歩いてみて、そしてそこから少しでも災害時のことを考えるようになればいいのではないのだろうか。そのためにこの訓練が、これからもっと多くの人にその意義を認知されるといいなと思う。



<sup>24</sup> 光が丘公園に限らず、オープンスペースの少ない都内ではほとんどの公園が避難場所(広域避難場所)として指定されている。

<sup>25</sup> 災害伝言ダイヤル171は、毎月1日に体験利用できる。防災週間(8月30日～9月5日)、防災とボランティア週間(1月15日～21日)も可。

<sup>26</sup> 大災害時、生き埋めなどになってしまうことを考え、笛を携帯電話ストラップに着ける方も最近は増えてきた。

<sup>27</sup> アンケートで「まだ歩ける」と答えの方は、訓練参加者の3割を超えている(P16参照)。

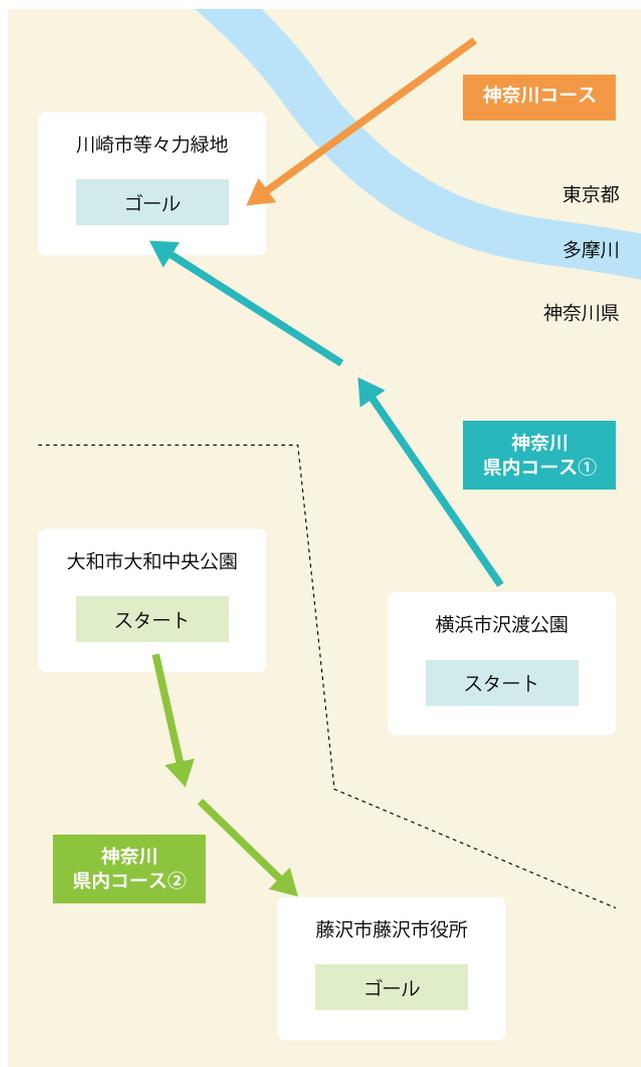


<sup>28</sup> 歩けるか否か、訓練に参加して初めて20kmを体感する方も多い。

<sup>29</sup> 想定では、帰宅困難者の88%が「通勤者・通学者」となっている。しかし移動の激しい現代では誰もかも帰宅困難者になる可能性を秘めている。

# 県内コース

## 神奈川県内コース



今回の訓練では、「日比谷公園⇒各県」コース以外に、神奈川県内、および埼玉県内でのコースを設けることができた。

両コースとも、自治体、市民団体、企業など、県内の関係団体の方々と連携した県内コース実行委員会を設置し訓練にあたった。

神奈川県内コースでは、昨年も県内コースを1コース設定したが、今回は2コースを設定。コース①の「横浜市⇒川崎市」コースでは、「日比谷公園⇒川崎市」コースとゴール地点を共有する形態を取った。また、コース独自に数多くの協力を得て訓練を実施した。

埼玉県内コースは、「日比谷公園⇒川口市」コースと一部コースを共有する形態で実施した。「日比谷公園⇒川口市」コースの昼食ASをスタート地点、ゴールASを昼食ASとするなど、訓練実施の上で新たな可能性を模索した。



神奈川県内コースで参加者に配布した参加証明シール

いずれの県内コースも、両県での帰宅困難者課題の認識を再度確認すると同時に、関係団体の意識の高まりが感じられた。



## エイドステーション設置訓練場所

東京コース	
二松学舎大AS	2.7km
トーハンAS	3.0km
西早稲田地域交流館AS	1.5km
清水川公園AS	1.5km
江原公園AS	3.7km
クラヤ三星堂AS	2.7km
日産プリンスAS	2.4km
ホテルカデンツァ AS	0.3km
光が丘公園AS	2.0km

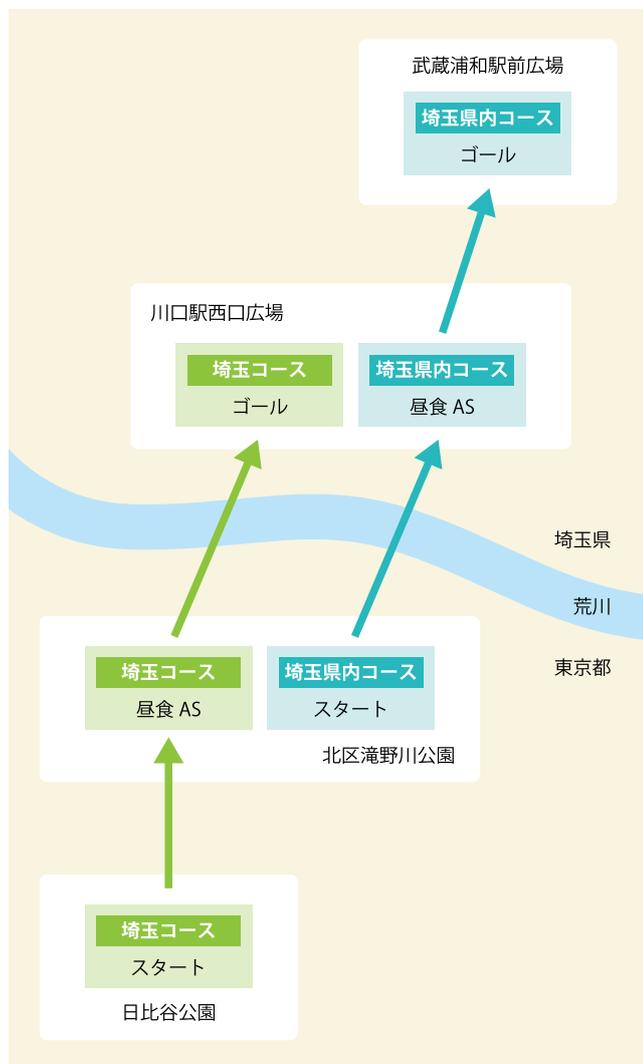
埼玉コース	
日大経済学部AS	3.5km
鷲籠町公園AS	3.0km
ソメイヨシノ公園AS	1.0km
滝野川公園AS	1.0km
神谷一丁目遊園AS	3.0km
北区庭球場AS	2.5km
労働会館AS	2.5km
川口駅西口公園AS	1.1km

千葉コース	
築地本願寺AS	2.0km
木場公園AS	4.2km
東高校AS	3.0km
宇喜田公園AS	2.5km
当代島公民館AS	3.0km
行徳駅前公園AS	3.5km

神奈川コース	
芝公園AS	2.0km
明治学院AS	3.0km
荏原特養ホームAS	2.8km
荏原南公園AS	2.5km
アルプス電気AS	2.5km
等々力緑地AS	3.2km

エイドステーションは7コースで総計45箇所設置された

## 埼玉県内コース



### 各コース実行委員長団体からの報告：埼玉コース

2008年に引き続き、埼玉コースの実行委員長団体として参加することとなった。今年の埼玉コースは、ゴール地点を埼玉県川口市の川口西公園としたが、ほぼ中間の9キロ地点にある「滝野川公園（北区）」以降は「県内コース」と同じであったことなどから、初めての重複コースの取り組みとなったが、短い準備期間には、東京災害ボランティアネットワーク事務局のサポートにより、大きなトラブルもなく無事訓練を終了することができた。このことはエイドステーション（AS）の運営をはじめ、参加いただいた各団体の惜しみない努力と真剣な気持ちの賜物であると改めて感謝申し上げる。

さて、今回の訓練でも、①徒歩訓練参加者への携帯サイトを利用した情報提供、②徒歩参加者へのASからの情報提供、③MCA無線の利用とバイク隊による本部～AS間等の運営情報の受発信、④訓練参加者の家族を含めた安否確認、など3つの情報伝達訓練を行った。

①携帯サイトによる情報提供については、参加者は出発前に登録できなかったようだ。また、ASでは携帯サイトのネットワークが使い切れなかったのではとの思いはある。②ASでのアナログ情報は、各ASで工夫を凝らした情報掲示板などができたと思う。③MCA無線は、情報伝達訓練より運営面の情報がメインとなっていた。バイク隊からの情報提供は年々精度が向上しているように感じた。

なお、今回はコースが重複した滝野川公園から川口西公園間のASの皆さんには、約6時間に及ぶ長時間の協力をいただいた。被災時はもっと大変だろうと経験が活かせる一方で、訓練の精度から見た場合には、来年は一考しなければとの課題を残した。

報告者：木村俊之(連合埼玉)

### 神奈川県内コース①

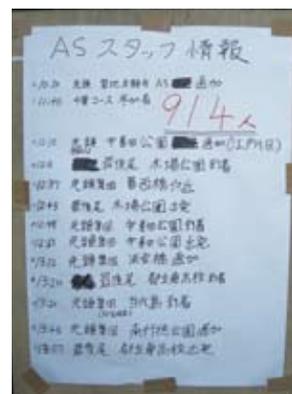
入江町公園AS
寺尾地区センターAS
小倉公園AS
中原平和公園AS
等々力緑地AS

### 神奈川県内コース②

大和消防署南分署AS
上高倉公園AS
藤沢北郵便局AS
湘南台公園AS
六会市民センターAS
県立体育館センターAS
済美館(公民館分館)AS
藤沢市役所AS

### 埼玉県内コース

下前公園AS
北五公園AS
武蔵浦和駅前広場AS



# 帰宅困難者に関する課題

## 想定650万人

さまざまな研究機関によると、首都圏でマグニチュード7以上の地震が今後30年以内に発生する確率は70%以上と推定されている。それに伴い、政府の中央防災会議では、平成15年5月～平成17年7月の「首都直下地震対策専門調査会」内で実施された被害想定において、膨大な人的・物的・経済的被害が発生することが明らかになったと発表した。

想定される課題は数多いが、その中でも、平日の昼間に東京で発災した際に、人口が集中する都心部で公共交通機関が機能を失うことによる帰宅困難者の大量発生は、都市災害の特徴的な課題である。

そこで発表されている帰宅困難者の想定は、冬の平日昼間に地震が発生すると、東京都内だけで約390万人、東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県 の1都3県では、約650万人もの帰宅困難者が発生すると予想されている。

なお、東京都では、平成18年5月に「首都直下地震による東京の被害想定」を作成している。この中では、都内で発生する帰宅困難者数は、中央防災会議の想定(都内で約390万人)を超える最大440万人強とされている。

### 帰宅困難者の定義

- ・各地区の滞留者のうち、帰宅までの距離が遠く、徒歩による帰宅が困難な人とする
- ・就業者、通学者だけでなく、私事目的による滞留者も考慮する
- ・震度5以上の揺れで交通機関は点検等のため停止し、また夜間に入るなど運行再開に時間がかかるため、各地とも滞留者の帰宅手段は徒歩のみとする
- ・帰宅までの距離が10km以内の人は全員「帰宅可能」とする
- ・帰宅距離10～20kmでは、被災者個人の運動能力の差から、1km長くなるごとに「帰宅可能」者が10%低減していくものとする
- ・帰宅距離20km以上の人は全員「帰宅困難」とする

帰宅困難者数(滞留目的別) ※昼12時の場合

	業務+学校	割合
埼玉県	約580,000	86%
千葉県	約690,000	85%
東京都	約3,500,000	90%
神奈川県	約960,000	85%
1都3県合計	約5,700,000	88%

平成17年7月中央防災会議 首都直下地震対策専門調査会報告書より

## 首都直下地震避難対策等専門調査会

平成17年7月の「首都直下地震対策専門調査会報告書」を受け、中央防災会議は、平成17年9月に「首都直下地震対策大綱」を、平成18年4月に「首都直下地震の地震防災戦略」を発表し、膨大な避難所生活者及び帰宅困難者について、今後軽減方策を具体的に検討し、その結果を踏まえて減災目標、具体的な目標等の提示を行うこととした。

平成18年8月には、避難者対策及び帰宅困難者対策について、さらなる具体化を図るため、中央防災会議「首都直下地震避難対策等専門調査会」が設置され検討が開始されている。

特に、帰宅困難者対策として、帰宅困難者が駅周辺や路上に滞留し混乱が生じることを防ぐため、「むやみに移動を開始しない」という基本原則の周知・徹底、企業・学校等への従業員・児童生徒等の一定期間の収容、徒歩帰宅者に対する情報や一時休憩施設の提供等について具体化を図るとしている。

「むやみに移動を開始しない」という基本原則は、想定される帰宅困難者の数を考えたとき、「一斉帰宅に伴う課題」のリスクがとて大きいことに基づいている。

### 帰宅困難者等対策の課題と主な対応策について(素案)

(一部抜粋)

#### 一斉帰宅に伴う課題

- ・延焼地域への進入に伴う消火・救助活動への支障
- ・障害物散乱道路や落下物危険地の通行に伴う死傷者の発生
- ・路上の混雑度増大に伴う体調不良者の発生
- ・歩行者による車道の占有に伴う緊急輸送への支障
- ・宿泊等の支援を要する徒歩帰宅者の増加に伴う避難所等への集中による混乱

#### 主な対応策

- ・一斉徒歩帰宅者発生の抑制
- ・むやみに移動を開始しないという基本原則の周知・徹底
- ・発災時における帰宅困難者等への必要な情報の提供
- ・企業における従業員等の収容対策
- ・学校における生徒等の収容対策
- ・安否確認システムの活用
- ・徒歩帰宅支援等
- ・水やトイレ等の提供
- ・一時休憩施設の提供
- ・避難所における徒歩帰宅者への対応の明確化
- ・救急・救護体制の検討
- ・混雑箇所での混乱の回避
- ・徒歩帰宅者が必要とする情報の提供
- ・企業・学校等における、外部からの帰宅困難者等への対応

平成19年12月中央防災会議「首都直下地震避難対策等専門調査会」(第9回)資料より

平成20年4月には、一斉帰宅が起こった場合、どの程度の混雑が発生する恐れがあるかのシミュレーション結果が発表されている。シミュレーションによると、国道や都道府県道、地方道を通り、緊急車両や停止車両で混雑する車道は使用せずに歩道を中心に歩くことを想定すると、1㎡あたりに約6人以上という満員電車の車内のような状態となることが判明している。この混雑状態では、1時間に400mほどしか歩けず、体調不良者の発生や群集なだれが起きることも大いに懸念されている。

## 帰宅困難者に対する支援策

帰宅困難者に対する支援策は徐々に整備されつつある。東京都では、徒歩による帰宅者に対する支援の一環として、島しょを除く全都立学校及び東京武道館を「帰宅支援ステーション」として位置づけている。帰宅支援ステーションでは、水道水・トイレ・テレビ及びラジオからの災害情報の提供を行うこととしている。上記以外にもコンビニエンスストアやガソリンスタンド、ファミリーレストラン等も同じ役割を担うため、東京都（もしくは八都県市）は各事業所と「災害時における帰宅困難者（徒歩帰宅者）支援に関する協定」を締結している。協定を締結した店舗では下記のような案内シールが貼られている。



コンビニエンスストア  
ファミリーレストラン



ガソリンスタンド

また、都では災害により鉄道が被害を受けた場合に備えて、バス・船舶による代替輸送手段を確保するなど、帰宅困難者が都心部に滞留しないための支援策を整備している。

他にも、外出者対策として、ターミナル駅周辺や繁華街等での滞留者対策訓練（混乱防止訓練）を区行政とともに実施している。さらに、八都県市の防災訓練では、各都県市が連携し、代替輸送訓練を実施すると同時に、各都県の総合防災訓練でも、重要な訓練プログラムとして位置づけている。

## 帰宅困難者課題の特徴

### 圧倒的な想定数

災害時に想定される帰宅困難者の想定数は、最大約650万人という圧倒的な数である。中央防災会議では、「（企業や学校における、従業員・生徒の一時的な収容によって）今後10年間で混乱を生じるおそれのある帰宅困難者数を半減～帰宅困難者数を約650万人から約330万人に～（平成18年4月中央防災会議）」という目標を掲げている。

### 複数の行政区を跨ぐ課題

各行政においては、行政区ごとの地域防災計画によって対策が講じられているが、帰宅困難者課題は、帰宅困難地点と自宅間の課題であり、多くの場合は、複数の行政区を跨ぐ課題となる。

### さまざまな主体に跨る課題

帰宅困難者のそのほとんどは「通勤者」と「通学者」であることを踏まえると、企業・学校にとって、とても重大な課題といえる。一方、帰宅困難者が通る沿道の自治体・企業・住民にとって、場合によっては数万から数十万人と予想される帰宅困難者が自身の地域を通ることを考えると、地域防災計画を根本から揺るがしてしまう課題といえる。

災害時における帰宅困難者の課題は、市民レベルで考えるだけでは及ばない。しかし、公的な取り組みだけで対応を考える課題でもない。帰宅困難者課題は、その圧倒的な想定数と複数の行政区を跨ぐという特徴を考えると、極めて多岐に及ぶ都市課題の一つである。したがって、中央政府、都県自治体、市区等の基礎自治体はもとより、関係機関やさまざまな民間の知恵と力を交流させながら取り組むべき課題といえる。

### 参考資料

- 内閣府防災情報のページHP（中央防災会議）  
<http://www.bousai.go.jp/chubou/chubou.html>
- 東京都総合防災部HP  
<http://www.bousai.metro.tokyo.jp/>
- 八都県市首脳会議防災・危機管理対策委員会  
<http://www.8tokenshi-bousai.jp/>

# 訓練の目的と趣旨

## これまでの帰宅困難者対応訓練

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会の主管団体である東京災害ボランティアネットワークは、1999年から毎年この帰宅困難者対応訓練を実施してきた。

当初は、都内を対象とした訓練を実施してきたが、2004年の訓練から東京都から千葉県(2004年)・埼玉県(2005年)・神奈川県(2006年)と各県へ向けた1コースの訓練を実施してきた。そして一昨年(2007年)、昨年(2008年)と、東京から一都三県に向けた計4コース同時開催の訓練を関係団体の方々と実行委員会を設立し、首都圏統一として実施した。

この帰宅困難者対応訓練は、市民が主体となって、各関係機関・団体と連携をしながら実施する訓練という側面を持っている。防災訓練というと、小地域や行政区域、また社内といった限られたエリアでの訓練となる場合が多い。しかし、帰宅困難者の課題は、限られたエリアだけでは対応できない課題であり、さまざまな団体・組織と連携・協働を意識する訓練ともいえる。

訓練は、三種類の訓練を同時に実施している。帰宅困難者を体験する「徒歩帰宅訓練」、沿道支援を体験する「エイドステーション設置訓練」、帰宅困難者への情報支援を実験的に実施する「情報伝達訓練」の三種類。これらの訓練内容は、2003年の訓練から変わらずに実施している。

## 何故「徒歩帰宅訓練なのか？」

中央防災会議では、「一斉徒歩帰宅の抑制」を帰宅困難者課題への対応として第一義的に位置づけている。この訓練を実施するにあたり、中央防災会議の指針に反しているのではと指摘いただくこともあった。

しかし、この帰宅困難者対応訓練は、徒歩帰宅を基本とし

ている。これは、頭の中の想像だけではなく、目で見て、耳で聞いて、足を動かして、そして心身に疲労を感じることで災害を擬似体験し、そのイメージをより具体的なものへと転化し、参加者



が「備え」を意識できればと考えている。

徒歩帰宅訓練は、約6時間もの間、訓練に参加することとなる。その間多くの参加者は、災害や防災・減災、そして「家族や会社が被災してしまったら」と考えながら参加している。非常に長時間の訓練ではあるが、市民が防災・減災を考える時間となる。

## エイドステーションの可能性

現在、八都県市(東京都・千葉県・埼玉県・神奈川県・千葉市・さいたま市・川崎市・横浜市)と、フランチャイズチェーン協会、各都県の石油業協同組合、都立高校などが協定を結ぶことによって沿道支援となる「エイドステーション(帰宅支援ステーション)」と位置づけられている。また、日本赤十字社東京都支部では、地域赤十字奉仕団や救護ボランティアにより、東京都地域防災計画における帰宅支援対象道路沿いに平成18年から5年間で30箇所の「赤十字エイドステーション」設置を予定している。

エイドステーションは、さまざまな主体が役割を担える。この訓練では、協定による帰宅支援ステーション設置だけではなく、市民から提案をすることによって、協定外でも沿道支援を検討していただける環境を作っていく。



今回の訓練でも、ASの環境によって機能に違いがあった

## 帰宅困難者課題における「情報」

帰宅困難者課題の中に、いかに帰宅困難者へ情報を伝達するかという大きな課題がある。

家族の安否情報、沿道支援情報、交通機関復旧情報など、帰宅困難者に伝達する情報も多岐にわたる。また、停電・電話の輻輳などを考慮した伝達方法も課題となっている。

訓練では、比較的災害時にも使用できる可能性があるインター

ネットや携帯電話のポケット通信などを使用した情報伝達や、ASでの壁新聞、バイク隊での伝言による情報伝達などさまざまな情報伝達を実験的に実施した。



災害時の情報伝達では欠かせないと思われるバイク隊



## さまざまな主体の参画～実行委員会の設立～

本訓練は、主管団体の東京災害ボランティアネットワークの呼びかけにより、実行委員会形式で実施された。実行委員会に名を連ねたのは、災害や防災・減災とは縁のない団体が多数見受けられる。これは、災害や防災・減災をテーマとしている団体だけではなく、社会を構成している全ての団体に対して呼びかけた結果である。

また、実行委員会・参加団体だけではなく、本訓練へは、さまざまな団体が有形無形の協力を展開した。結果として、訓練に参加していない市民が「帰宅困難者課題」に触れる機会となった。特に、チラシの配付・ポスターの貼付は、その最も大きな影響があった。チラシ60,000枚、ポスターは4,000枚作成し、実行団体をはじめ、さまざまな団体に配布し訓練への参加を促した。その結果、「チラシ・ポスターを見て」、問い合わせや申し込みが多数あった。

## 次への備え

この訓練は、次の災害に備えるための訓練として実施されている。しかし、決して本訓練に参加した団体・組織が次の災害時に帰宅困難者支援を直接的に実施するための訓練ではない。災害時における帰宅困難者課題は、都市災害課題を考えると、最重要課題の一つではあるが、その全てではない。あくまでも、数多くある都市災害課題の特徴的で具体的な課題でしかない。

次への備えとして、以下の目的を持ってこの訓練は実施された。

①首都圏の巨大地震発災を想定し、帰宅困難者対応課題への

取り組みを具体的に実施する。

②訓練中で多様な市民・団体のより深い関わりと気づきを高めていく。

③帰宅困難者課題だけではなく、さまざまな災害課題への具体的な取り組みに着手できる環境作り。

### 各コース実行委員長団体からの報告：東京コース

東京コース徒歩訓練参加者553名は、日比谷公園を朝10時にスタートし、その間、8カ所のエイドステーション(以下はASと略す)で応援や支援物資を受けながら、目白通り・新目白通りを歩き続けました。そして、373名がちょっと疲れた笑顔でゴール地点の都立光が丘公園に到着しました。大きなトラブルもなく、しんがり隊はゴール地点に午後4時30分に到着し、最終ASが用意してくれたお汁粉を食べながら無事に終了したことを祝いました。訓練参加者全員に発災後どう対応するべきなのかを歩きながら考えていただけたと実感します。

コース内の8カ所のASは、ボランティアセンター、町会、ボーイスカウト、行政、連合東京西北地協、生協や地域の各種組織、併せて36団体がテント・机・イスなどの物資提供や運営全般を行いました。飲料水、アルファ化米、缶詰、バナナ等の物資もさまざまな団体組織から提供いただきました。

安全に注意し事故がなく、地域の方々に多大な迷惑を掛けず、各ASは事前に丁寧な打合せがされていたためトラブルに際しても適切に対処し円滑に運営がされていました。

今回の訓練は、地域で活動している組織に防災を理解いただき、連携を上げ、その地域の力を活かしたAS運営をするという目的を十分に達成することができました。

報告者：竹内誠(東京都生活協同組合連合会)

# 訓練の成果

## 4797名の参加者

本訓練は、総計4,774名の参加となった。徒歩帰宅訓練3,558名、エイドステーション設置訓練・情報伝達訓練等1,216名である。2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練の参加者数とほぼ同数の参加者数となった。

これは実行委員団体をはじめとするさまざまな団体の協力を得られた結果といえる。帰宅困難者をテーマとした訓練としては最大規模の参加者数といえる。

徒歩帰宅訓練参加者のゴール率を見ると、84.6%と高いゴール率となっている。20km近くもの距離を、5～6時間かけて歩く防災訓練としては非常にハードな内容であるにもかかわらず、最終ゴール地点まで歩いた参加者が多かったことは、参加者が帰宅困難者課題を自らの課題として受け取っていることが窺える。

また、本訓練では、神奈川県内コースを除く5カ所の最終ゴール地点で徒歩帰宅訓練参加者に対し、共通アンケートを実施している。総計で2,178名の最終ゴール到達参加者から

1,742名の回答を得られた。回答率は80.0%となっている。

このアンケートから参加者の年齢傾向を見ると、20～50代が74.9%であり、帰宅困難者になる可能性の高い(想定では88%が通勤者・通学者)働き盛りの勤労者が参加していることがわかる。また、2008年と同様に女性の訓練参加者は多かった。2007年時は、男性79.6%、女性19.3%、2008年時は、男性65.2%、女性32.6%、今回の訓練では、男性68.0%、女性30.0%となっている。

### 何を通じて訓練を知ったか

今回の訓練参加者に、何を通じてこの訓練を知ったかを聞いている。最も多かったのは「労働組合を通じて」で38.8%となっている。労働団体である連合東京、連合千葉、連合埼玉、連合神奈川が労働者の課題として本訓練に参画した意義は大きい。次に多いのが「会社を通じて」で18.3%。帰宅困難者課題が通勤者の課題であることから労働組合・会社といった生活圏以外で知ることが多いことがわかる。

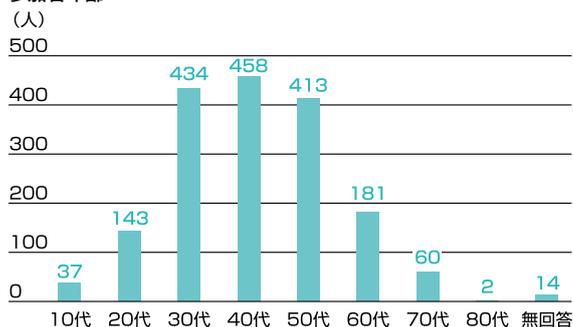
2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練参加者数内訳(スタート地点での集計より)

コース名	徒歩訓練	完歩者数	ゴール率	AS設置訓練	合計参加者数
東京コース	553名	373名	67.5%	214名	767名
千葉コース	914名	727名	79.5%	203名	1,117名
埼玉コース	508名	457名	90.0%	213名	721名
埼玉県内コース	333名	266名	79.9%	102名	435名
神奈川コース	380名	355名	93.4%	151名	531名
神奈川県内コース①	380名	372名	97.9%	81名	461名
神奈川県内コース②	490名	460名	95.8%	106名	596名
日比谷公園設営のみ	—	—	—	—	47名
運搬・運搬遊軍	—	—	—	—	17名
情報訓練・バイク隊	—	—	—	—	13名
GS	—	—	—	—	69名
合計	3,558名	3,010名	84.6%	1,070名	4,774名

参加者性別



参加者年齢



## 訓練の意義

「とても意義があった」「少し意義があった」を合わせると98.4%。2007年時、2008年時とも90%を超えており、参加者にとって意義を感じやすい訓練といえる。

## 疲労

60.6%の参加者が「20km地点」までに疲労を感じている。14.8%の方々は「10km地点」で疲労を感じている。一方、「まだまだ歩ける」と答えた方が33.5%もいた。

## 必要な物

帰宅困難者になってしまった場合、必要になる物を複数選択可の条件で聞いた。大きく分けると「水」「食糧(携行食含む)」を歩くためのエネルギー源、「靴(スニーカー)」「防寒具・雨具」を長距離を歩くのに便利な物、「携帯電話(もしくは携帯電話バッテリー)」「ラジオ」を情報入手のツールと定義していた。

圧倒的に多かったのが、水で34.7%。そして食糧も17.5%で三番目に多かった。帰宅困難者になってしまった場合、最も水と食糧の心配をしていることがわかる。水に次いで多かったのが、靴(スニーカー)の20.2%。そして雨具は5.2%。歩いた者にしかわからないことだが、自宅までの距離や天気・季節に対しては、思いのほか気になる傾向がある。

最後に災害時、最も重要とさえされている情報に関する項目

である「携帯電話(もしくは携帯電話電池)」「ラジオ」。結果は携帯電話(もしくは携帯電話電池)と答えたのは11.5%、ラジオは8.3%であった。災害時における情報の収集は必須ではあるが、本訓練の参加者からは、情報ツールについては水や食糧に比べると圧倒的に少なかったといえる。これは、エイドステーション設置訓練の壁新聞などアナログ情報が充実していたことが起因していると考えられる。通信が途絶される携帯電話や、俯瞰情報になってしまうラジオよりも、エイドステーション等で手に入れられる直近の情報に関心があったと思われる。また、「その他」として、「トイレ(携帯用)」と答えた参加者も多かった。

## 欲しい情報

帰宅困難者になってしまった場合に、最も欲しい情報を聞いた。最も多かったのが「沿道の被害情報」で30.7%。次いで「ロードマップ・地図情報」の29.8%、「支援拠点設置情報」の28.4%であった。

沿道の被害情報はラジオなどのメディアを通じて入手できる可能性があり、ロードマップは事前に準備することができる。しかし、沿道の支援拠点情報については、災害時にどこまで提示されるかは未知数といえる。約3人に1人が「最も欲しい」と感じた沿道支援拠点情報の発信は今後の課題だろう。

## 各コース実行委員長団体からの報告：千葉コース

今年度も帰宅困難者対応訓練が9月26日(土)に開催されたが、私は千葉コースの実行委員長である廣田光司氏(東京YMCA総主事)が歩行訓練にも参加した関係で街宣車に乗り、終日の流れを見ることになった。

まず、昨年大変混雑をした受付への反省を生かし、東京YMCAのほか、浦安市、連合千葉、ふるさと会や一般のボランティア約20名が、テント設営から運営、撤収まで行い、順調にスタートすることができた。今年は昨年に比べ参加者が914名と予想に反して少なかったこと、ボランティアが充実していたこと、受付経験者のリードがあったことが要因として挙げられるだろう。

訓練スタートは午前10時。私も街宣車に乗り後を追った。まず先頭のスピードが速すぎ、走りに近いことに驚いた。これはレースではなく、あくまでも徒歩帰宅訓練であることをもっと参加者に理解していただく必要を感じた。

途中、訓練参加者が横並びで道を歩き車椅子の方が通りにくかったというクレームが入ったため、宇喜田公園を過ぎた時点から、街宣車からも一列で歩くよう注意を促した。また、広い道路の両側に分かれて歩いているときもあったが、これも課題であるように感じた。

各エイドステーションでは、配水、配食、情報提供、励まし

などを行ったが、紙コップ削減のためペットボトルを使用していたため、声かけは大変有効で、多くの人が自分のペットボトルに給水してくれた。また、頑張ってください! という励ましに笑顔で応えてくれる参加者に、担当ボランティアもまた励まされたように思う。

昼食のエイドステーションでは火を使える場所が限られてしまったため、配食には苦勞をした。やはり作る場所と配食と飲食の場所は同じであるのが望ましいだろう。それでも参加者はボランティアによって用意されたアルファ化米と味噌汁、缶詰を食べ、また元氣をもらってゴールを目指した。そして、ゴールをした人たちは、大変だったと感じながらも、災害時への備えの大切さを訓練を通して感じていたように思う。

千葉コースはいつも多くの参加者があり、年々課題も抽出されるが、今年は昨年より良いものをと、事前の準備委員会でも改善に努めてきた。この訓練はさまざまな立場にある団体が同じコースを担当するので、緊密な連携による意思疎通がとても大切である。今年もさまざまな課題が出されたが、次年度はより良くという願いで臨んでいきたい。

報告者：南宮成一(東京YMCA)

## 帰宅困難時の行動

最も多かったのは「歩いて自宅に帰る」の37.5%。この割合を多いとみるか少ないとみるか判断は分かれるだろう。現在、内閣府の中央防災会議や各自治体で「その場に留まる」ことの周知がなされていることもあり、「帰社・帰校する」「その場に留まる」が合わせて24.7%となっている。

## 帰宅ルートについて

会社や学校から自宅までの帰宅ルートについて聞いた。「複数の帰宅ルートを知っている」が46.0%、「一つは知っている」が37.4%、合わせると83.4%の参加者が自宅までの帰宅ルートを知っていることがわかる。

## 帰宅マップについて

沿道支援拠点が記載された帰宅ルートマップの必要性について聞いた。「独自のマップを作成」「既存のマップを用意」で86.9%と帰宅ルートマップの必要性についてはほとんどの方が感じている。

## 連携と協働による実践

本訓練は、アンケート結果のみを見ても、大きな社会的意義を感じさせる。それは、訓練参加者はもちろんのこと、この取り組みを実践した実行委員団体や関係機関にとっても、同様ではないだろうか。

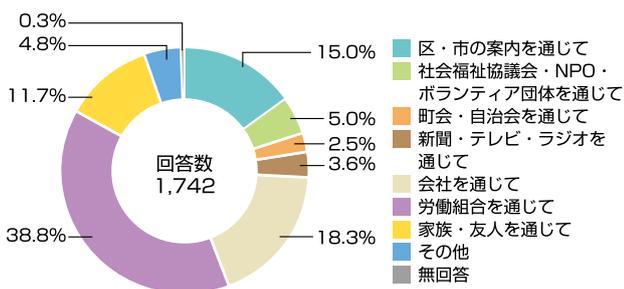
帰宅困難者課題は、当事者だけで対策を考えるべき課題ではない。帰宅困難者と想定される通勤者・通学者の企業・学校はもちろんのこと、帰宅困難者が発生する自治体・地域社会、帰宅困難者が通る沿道の自治体・地域社会、そして各種社会団体や専門家が知恵を出し合いながら対策を検討する必要がある。

本訓練では、労働団体、消費者団体、社会福祉団体、企業、県市区の自治体、そして多くの市民の方々と連携と協働の実践が行われた。このことこそが最大の成果である。

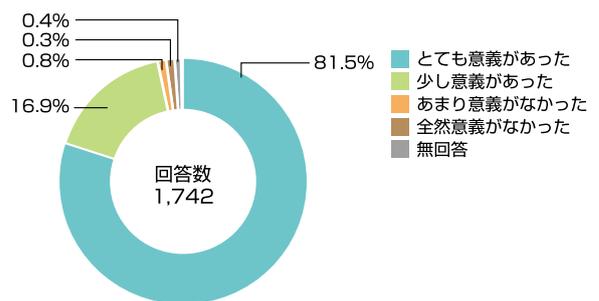
特に、今回は埼玉県が自治体として初めて実行委員会へ参画した。市民活動と自治体(行政機関)との連携と協働が社会には欠かせないといわれるようになって久しいが、本訓練での埼玉県は主体的かつ責任を持った参画となった。

## アンケート結果

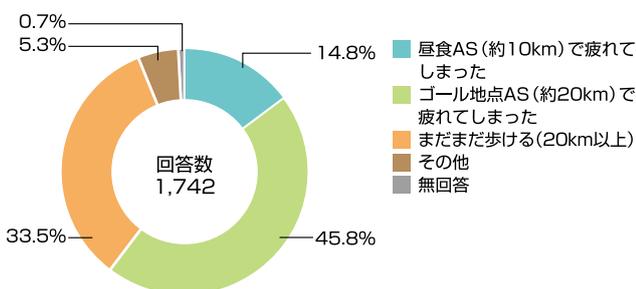
### 1. 今回の訓練は何を通じて知りましたか？



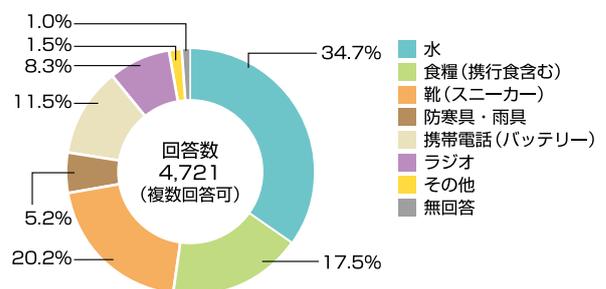
### 2. この訓練に参加して、意義がありましたか？



### 3. 訓練参加後の疲労度をお聞きます。



### 4. 震災時、帰宅困難者になってしまった場合、最も必要な物は何ですか？(複数選択)



## 各コース実行委員長団体からの報告：神奈川コース

連合東京は政策制度要求の中で、都心部の防災対策については行政区を越えて一体的な対策を講じることを求めています。その意味でここ数年開催されている首都圏統一帰宅困難者対応訓練は、政策実現の具体化という意味でも重要な活動として位置づけています。

今回も連合東京は神奈川コースの実行委員長となり、コース上にかかわる団体とともにコース実行委員会を開催し運営に努めてきました。この他、各エイドステーション(AS)を受け持つ団体ごとに打合せが行われるなど、訓練を通じてさまざまな団体との関係づくりや橋渡しができたことは、今後引き続き訓練を実施する上でも大きな成果といえます。

訓練当日の昼食ASには品川区防災課より資機材の提供を受け、運営は連合中南地協の役員・組合員が担当し、豚汁とアルファ化米・缶詰を提供しました。この他にも荏原特養ホームASは品川高退連(連合の退職者団体)、他アルプス電気ASはアルプス電気株式会社の全面的な協力のもと、多くの社員に参加していただき、またこれらのASには大田区社協の皆さんもご協力をいただいたことで、運営をスムーズに行うことができました。

この他、今回は神奈川県内コースとして2つのコースが設定されており、特に日比谷公園～等々力緑地までのいわゆる神奈川コー

スと県内コースの一つである横浜～等々力緑地がゴール地点で一緒になったことから、連合神奈川川崎地域連合や川崎労福協の皆さんが大きな役割を担っていただき、ゴール地点ではお汁粉の提供や、JB日本接骨師会による柔整マッサージ、川崎市水道局から給水車も提供していただくなど、ゴールのASを支えていただきました。

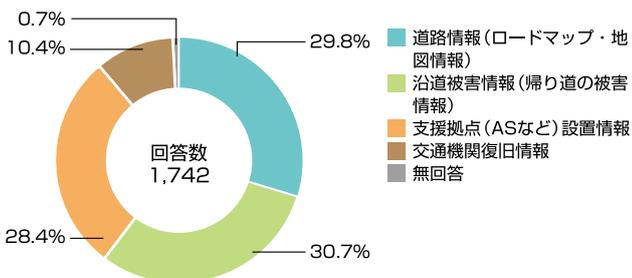
このような充実したASの機能については、コース上にかかわる団体の協力はもちろんですが、非常食を提供していただいた東京電力(株)、清泉女子大学、水や軽食を提供していただいたフード連合に加盟する多くの組合、さらには物流を担当していただいた運輸労連の各組合など、多くの団体や人々の協力によりこの訓練が成り立っており、その重要性をあらためて実感しています。

連合には多くの労働組合が加盟しており、労働組合や各企業、各団体、多くの市民がこうした訓練を通じてそれぞれの役割を認識し力を発揮すれば、大きな役割を果たすことができると思います。

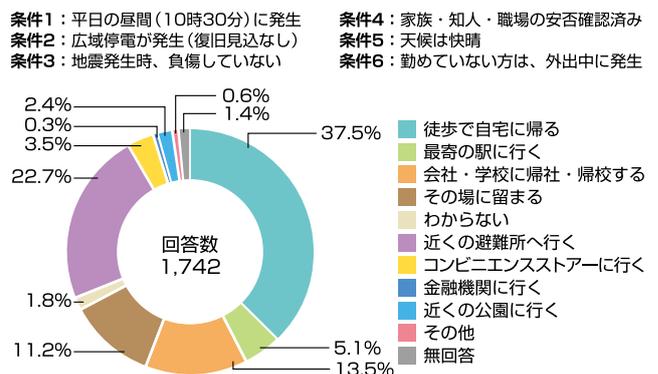
そのためにも、引き続き連合東京は首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会の一員として、神奈川コースにとどまらず、すべてのコースの運営に携わり、その役割を果たしていきたいと思えます。

報告者：川本晃義(連合東京 福祉局長)

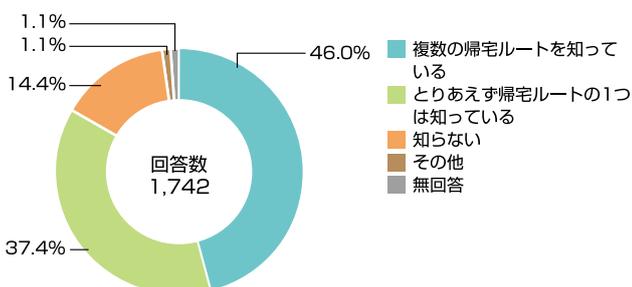
### 5. 震災時、帰宅困難者になってしまった場合、最も欲しい情報は何かですか？



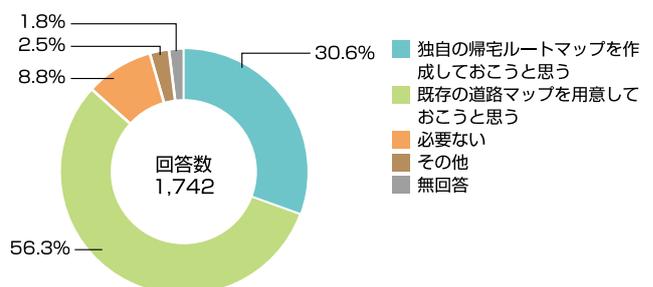
### 6. 実際の災害時、全ての交通機関が途絶した場合、下の条件を考慮し、一番最初にどのような行動をとりますか？



### 7. 勤務先や学校などから自宅までの経路(帰宅ルート)を知っていますか？



### 8. 勤務先や学校から自宅までの帰宅ルートや、公共施設のほかコンビニ・ガソリンスタンドなどの帰宅支援拠点などが記載された帰宅ルートマップの必要性についてお聞きます



# 参加された方々の声

## 得られた気づき

「本訓練の目的を、単に『早く歩く』ことと捉えている人が多いように感じる」

「沿道には電柱やガラス張りのビルが多く、**災害時には道路をふさいで**通行の邪魔になるだろうと思った。また長い橋が多く、途中で亀裂を見つけても無事に渡りきったり、引き返したりできるかわからないだろうと思った」

「実際に災害(地震)が起きると、帰宅経路に橋が大小多数存在するため、ここが通れるかどうかが問題になります。大きな橋については渡ろうとしていたところが使えないと、近くに行ってからわかると大変遠回りになるので**あらかじめ情報があると助かります**」

「**トイレです**。天候にもよりますが、晴天で気温が高いと水分をよく摂るため、トイレへ行く回数が増えてきます。しかし、公共のトイレがすぐあるわけではなく、非常に困りそうです。休憩ポイント(公園)のトイレは長蛇の列でした」

「今回はスニーカーでの参加でしたので、そこまで足が痛くはなりませんでしたが、革靴だと**かなり歩きにくいだろう**と感じました。会社にスニーカーを置いておけば解決するかもしれませんが、いかんせん会社に置くスペースがあまりないのが現状です」

「途中にボランティアの方もいて、給水等もあり問題なく歩くことが出来ましたが、災害時は、建物が倒壊し足元も悪く実際に**徒歩で帰宅は困難**であることがはっきり認識出来たことは大きな気づきでした。まずは安全な場所で様子を見て情報収集に努め、交通機関の復旧を待ち帰宅した方がよいかと思いました」

「たとえば勤務先から歩くことを考えると、ヒールでは絶対無理だと痛感しました。今回は限られた人が歩きましたが、実際には思うように歩けないでしょうし、精神的にも**パニックになる可能性**もあることを考えると、複数のルートを確認したり、落ち着いて行動できるように心がけなければと感じました」

「まず、都心からの帰宅経路がわからなかったので、それを**知ることができてよかった**。歩道橋の有無や、勾配の具合など、実際に歩いてみなければわからなかった」

「東京都内から横浜への幹線道路の様子が歩いて確認できたので**非常に参考になった**」

「実際災害にあった場合、こんなに楽に歩けないこと。20kmという距離がどれだけ遠く、**到達まで困難**であるか知りました」

## 今後取り組めると 思えることは

「スニーカーを会社に用意すること。**会社から自宅までの経路**を調べておくこと」

「訓練にはトレッキングシューズを履いて参加したので歩くのに問題なかったが、職場での被災時にはビジネスシューズを履いているため、訓練時のように歩けるかどうかはわからない。職場に**底の厚いウォーキングシューズ**を常備しておく必要を感じた」

「自宅近辺の避難地を確認することや、**携帯の安否確認**を利用するようになり、万が一の場合に備えて話し合うことも必要だと思います。漠然と考えるだけだと、いざという時にはどうにもならないと思いました」

「**本訓練への参加呼びかけ**。話をしたら、興味を持ってくれた人が私の周りでも結構いました」

「今は特に思いつきませんが、この訓練はできるだけ多くの人が**参加することが効果的**だと思われます」

## ボランティアへの声

「今回参加されたボランティアの方々や協賛企業には、**感謝の気持ち**で一杯です」

「暑い中、エイドステーションや食事場所での活動は本当に大変だったと思います。どの方からも『お疲れ様です』『ご苦労様です』と明るく声をかけていただき、本当の災害時にも**“コトバノチカラ”**というものは、とても大きいのではないかと感じました」

「本当にたくさんの方々の力に**支えられて**、完歩することができたと思う」

# 訓練までの経過

この訓練では、具体的な訓練を実施することで、さまざまな団体が顔の見える関係を構築する機会となるよう、実行委員団体をはじめとして数多くの団体が集まれる機会を大切に

きました。訓練運営に関する意見交換の場を持つことで、それぞれの団体の長所や短所を知り、今後に向けた連携・協働を考える機会となりました。

## 実行委員会

第一回実行委員会	6月 9日(月)	於 連合東京会議室
第二回実行委員会	6月29日(月)	於 連合東京会議室
第三回実行委員会	7月16日(木)	於 連合東京会議室
第四回実行委員会	8月10日(月)	於 連合東京会議室
第五回実行委員会	9月 7日(月)	於 連合東京会議室
第六回実行委員会	9月24日(木)	於 連合東京会議室

## コース実行委員会

### 東京コース

第一回東京コース実行委員会	7月15日(水)	於 東京都生協連会議室
第二回東京コース実行委員会	7月28日(火)	於 東京都生協連会議室
第三回東京コース実行委員会	8月25日(火)	於 東京都生協連会議室
第四回東京コース実行委員会	9月14日(月)	於 東京都生協連会議室
第五回東京コース実行委員会	10月20日(火)	於 東京都生協連会議室

### 千葉コース

第一回千葉コース実行委員会	7月21日(月)	於 東京YMCA会議室
第二回千葉コース実行委員会	8月 5日(水)	於 東京YMCA会議室
第三回千葉コース実行委員会	8月25日(火)	於 東京YMCA会議室
第四回千葉コース実行委員会	9月14日(月)	於 東京YMCA会議室
第五回千葉コース実行委員会	10月15日(木)	於 東京YMCA会議室

### 埼玉コース

事前検討会	7月28日(火)	於 連合東京会議室
第一回埼玉コース実行委員会	8月 7日(金)	於 北区NPO・ボランティアぷらざ会議室
第二回埼玉コース実行委員会	8月26日(水)	於 北区NPO・ボランティアぷらざ会議室
第三回埼玉コース実行委員会	9月16日(水)	於 北区NPO・ボランティアぷらざ会議室

### 神奈川コース

第一回神奈川コース実行委員会	7月14日(火)	於 連合東京会議室
第二回神奈川コース実行委員会	8月10日(月)	於 連合東京会議室
第三回神奈川コース実行委員会	9月 7日(月)	於 連合東京会議室
第四回神奈川コース実行委員会	9月24日(木)	於 連合東京会議室
第五回神奈川コース実行委員会	10月23日(金)	於 連合東京会議室

上記以外にも、コース下見、コース実踏、県内コース実行委員会など、個別の打ち合わせや団体内での協議など、多数の「場」が持たれました。



数多くの参加者があった本訓練であるが、この訓練を実施するために各団体が幾度も顔を合わせて打ち合わせをおこなっている



# 財政報告

## 収入

収入項目	団体名	金額
実行委員会団体支援金	連合埼玉	¥3,180,000
	中央労金社会貢献基金	
	連合千葉	
	連合神奈川	
	(特)地域創造ネットワーク	
	東京労働者福祉協議会	
	東京都生協連合会	
	全労済東京都本部	
	自立支援センターふるさとの会	
	連合東京	
	自治労東京都本部	
	(財)東京YMCA	
	JB日本接骨師会	
	東京ボランティア・市民活動センター	
シャンティ国際ボランティア会		
埼玉県 消防防災課		
助成金	連合愛のキャンパ	¥1,300,000
	真如苑	
	東京都共同募金会	
雑費	利息	¥179
繰越金	2008年訓練実行委員会より	¥334,869
<b>収入合計</b>		<b>¥4,815,048</b>

## 支出

支出項目	備考	金額
郵送費	資料郵送費、訓練案内郵送費、物品輸送費など	¥109,485
交通費	レンタカー代金、事前準備交通費など	¥383,094
当日物品費	ゼッケン・横断幕・修了証作成費、紙コップ・粉末茶・飲料水購入費など	¥771,935
コース	各コース実行委員会への拠出	¥154,540
消耗品費	コピー代、文具購入費など	¥196,959
広報費	ポスター作成費、昨年度報告書増刷費など	¥374,650
保険費	行事保険費	¥108,500
雑費	振り込み手数料など	¥2,730
企画運営費	渉外費・企画費・団体調整費・人件費など	¥1,500,000
報告書作成	報告書作成費、報告書印刷費、報告書郵送費など	¥520,000
<b>支出合計</b>		<b>¥4,121,893</b>

**総収入：¥4,815,048    総支出：¥4,121,893    収支：¥693,155(2010年繰越金へ)**

なお、フード連合(14労組が提供)の方々を中心に、さまざまな企業・団体から飲料・携行食品など、金額にするとおよそ100万円の現物提供をいただいております。資機材運搬に関しては、運輸労連(3労組が協力)の方々を中心に、車両貸し出し・ドライバー派遣をいただいております。チラシ作成(60,000枚)に関しては、コンポーズ・ユニのご提供をいただいております。また、各ASなどで配布した物品などを地域参加団体の方々からご提供いただいております。

2010年01月25日現在

## 会計監査報告書

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会  
実行委員長 遠藤幸男 様

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会監事  
監査 梅村敏幸  
荻野里美

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練の会計<自2009年4月1日～至2010年1月31日>の監査結果を、次の通り報告いたします。

### 記

- 【1】 監査実施日 2010年1月29日(金)
- 【2】 監査場所 東京災害ボランティアネットワーク事務局  
(東京都生協連会館3階事務所内)
- 【3】 監査対象 訓練会計
- 【4】 監査結果 会計帳票および決算報告書等を基礎とし、帳票照合および計算を実施したが、符合していた。決算報告書は、2010年1月29日現在の会計期間内活動状況を適正に表示しているものと認められる。

以上

### 埼玉県内コース実行委員会実行委員長団体：埼玉県

今までは、県単独として実施してきた徒歩帰宅訓練を、今年度は首都圏統一帰宅困難者対応訓練と共催で実施させていただきました。

コースは、北区滝野川公園をスタートし、JR埼京線の武蔵浦和駅前のラムザ広場をゴールとした約18kmを実施し、300人を超える参加がありました。

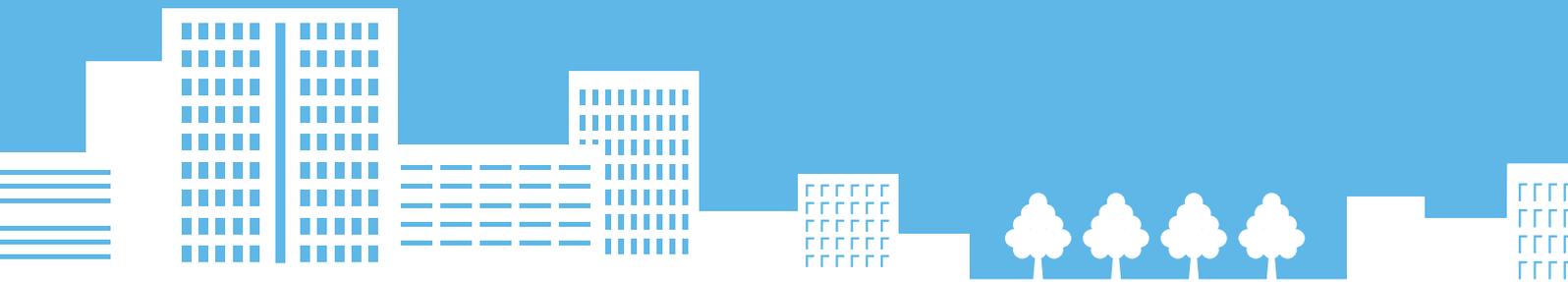
県が実施してきたこれまでの訓練では、エイドステーション(AS)を設置することなく、さらに、コース沿道の区市町村も未経験であったことから、いろいろな点で手探り状態でしたが、特に大き

なトラブルもなく無事訓練を終了できたことは、ひとえに地元区市町村やAS開設に協力をいただいた各団体の方々の御協力によるものと感謝しています。

今回の訓練を実施して感じたことは、徒歩帰宅訓練と同じように、徒歩帰宅者が通過する地域で何が支援できるのかをその地域で考えてもらうことが重要だということでした。

この訓練を通じて築いた多くの方々との横のつながりを大事にし、この経験を今後にかかしていきたいと思っております。

報告者：埼玉県



## 2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練実行委員会

〒162-0011 東京都中野区中央5-41-18 東京都生協連会館3階  
東京災害ボランティアネットワーク事務局気付

TEL : 03-3380-1614 FAX : 03-3380-1615

E-mail : [office@tosaibo.net](mailto:office@tosaibo.net)